

オレオサイエンス原稿作成の手引き

オレオサイエンス編集委員会

原稿の様式および作成は次のとおりとする。

- 1 **タイトルページ:** 原稿の1枚目は表紙とし、原稿の題目、著者名、所属機関名、郵便番号、住所、電話番号、FAX番号および連絡者名とその連絡先（電子メールアドレス等）を日本語および英語で記入する。
- 2 **「総合論文」および「総説」原稿の書き方:**
 - 2-1 原稿は、表紙、英文および日本語による要旨、本文（図-表を含む）、文献、および著者の顔写真（3×4cm）で構成される。
 - 2-2 原則として、原稿は、本文（図-表を含む）、文献を含めて13600字以内（800字詰めA4用紙で17枚程度）とする。
 - 2-3 英文による要旨は約200語で作成し、英語のキーワードを4~5語付ける。日本語による要旨は英文のサイズに準拠して作成する。
 - 2-4 原稿の本文はA4版用紙を縦長に用いて横書きで作成する。文字数および行数は25字×46行とし、上下に3cm、左右に4cmの余白を設ける。
 - 2-5 英文による要旨はA4版用紙を縦長に用いて、50字×32行でダブルスペースで印字する。
 - 2-6 本文の区分けは原則としてポイントシステムとし、1、1-1、1-1-1のように大見出し、中見出し、小見出しを付ける。
 - 2-7 ゴシック（ゴ）、イタリック（イタ）の書体、および上ツキ（V）、下ツキ（八）は、原稿に赤で指定する。
 - 2-8 本文に添付する図-表は、A4版白色無地用紙に英文で作成する。図はそのまま縮小して複写印刷できるように鮮明に描く。図の表題と説明は原則として英文で書き、Figure Captionsとして本文の後に別紙で添付する。表の表題も英文とする。ただし、同一のデータを図と表で重複することはできない。
 - 2-9 図-表は原則として1点を400字として換算する。
 - 2-10 文章は簡潔に、常用漢字と現代かなづかいを用いて書く。外国語（単語、人名、地名、会社名など）は原語またはカタカナを用い、大文字は固有名詞の頭文字に限る。
 - 2-11 略号を用いる場合は、初出の際（ ）にその略号を示す。
 - 2-12 本文中の字句に注を加える場合は、その右カタに注1)のように上ツキ記号を付け、原則としてその原稿用紙の最下行に注1)と書き、本文との間に線を入れる。注の番号は通し番号とする。
 - 2-13 文中で図と表の説明をする場合は、**Fig. 1, Table 1**、また文の最後に付けるときは**(Fig. 1)**、**(Table 1)**のように記入する。図表は、論文中に1つしかない場合でも**Fig. 1, Table 1**と表示する。
 - 2-14 用語は文部省学術用語集（南江堂最新版）、および本学会（用語小委員会）の推奨する学術用語を用い、記号、符号、数式等は国際的に慣用されたもの、単位は原則としてMKS単位系を用いる。

3 その他の投稿原稿の書き方:

- 3-1 原則として要旨は付けない。ただし、必要に応じ日本語による要旨を添付することができる。
- 3-2 「研究備忘録」、「資料」は、原則として刷り上がり 4 ページ以内とし、「トピックス」、「新製品ニュース」、「提言」、「オイルコーナー」は、原則として刷り上がり 2 ページ以内とする。
- 3-3 「Q & A」、「E メール」、「求人-求職」、「学会情報」は短く簡潔に書くものとする。
- 3-4 「E メール」は誌上でのペンネーム、イニシャル (匿名) を認めるが、投稿の際は、氏名 (会員番号)、所属機関名、連絡先 (電話番号、FAX 番号、電子メールアドレス) を記入した後、本文を短く簡潔に書くものとする。
- 3-5 その他は「総合論文および総説原稿の書き方」に準ずるものとする。

4 文献:

- 4-1 文献は引用個所に上付きの番号を付して明記する。引用件数は必要最小限にとどめる。
- 4-2 引用文献の略し方は、Chemical Abstracts に準ずる。
- 4-3 論文を引用する場合には、次の順で執筆する。
著者名、雑誌名 (イタリック)、巻 (ボールド)、ページ (年号)。

(引用例)

- 1) T. Sakai, H. Sakai, M. Abe & K. Kamogawa, *Oleoscience*, **1**, 33-46 (2001).
- 2) 吉本敬太郎, 非ワトソン-クリック塩基対部位を認識する小分子プローブ, *化学と工業*, **55**, 582 (2002).
- 3) 日本油化学協会編, 第四版 油化学便覧, 丸善, p.132, (2002) .
- 4) Y. Takizawa, N. Abe & H. Shimazaki, *Solubilization in Surfactant Aggregates* (S.D. Christian & J.F. Scamehorn edn.) Marcel Dekker, New York, p.333 (1997).
(著者と編者が異なり, 単行本の中のある章の部分を引用する場合)
- 5) Y. Takizawa & M. Abe, *Mixed Surfactant Systems*, Marcel Dekker, New York (1998).
(著者と編者が同じで, 単行本の全てを対象として引用する場合)
- 6) 菅野道廣, 油脂の栄養と疾病, 原一郎監修, 島崎弘幸, 町田芳章 編, 幸書房, pp.150-60 (1990).
- 7) 近藤行成, 伊沢禎二, 好野則夫, 第 38 回 油化学討論会-講演要旨集, 名古屋, p.22 (1999).
- 8) 大竹勝人, 阿部正彦, 特願 2000-313599 (2000).
- 9) 木川 仁, 高木 優, 特開平 10-251674 (1998).
- 10) H. Kigawa & S. Takagi, US Pat. 5798434 (1998).